校異源氏物語・たけ川

これは源氏の御そうにもはなれ給へりしのちのおほとのわたりにありけるわるこたちのおちとまりのこれるかとはすかたりしをきたるはむらさきのゆかりにもにさめれとかの女とものいひけるは源氏の御するゑ　くにひか事とものましりてきこゆるは我よりもとしのかすつもりほけたりける人のひかことにやなとあやしかりけるいつれかはまことならむ内侍のかみの御はらにことのゝ御子はおとこ三人女二人なむおはしけるをさま　くにかしつきたてむことをおほしをきてゝとし月のすくるも心もとなかりたまひしほとにあえなくうせ給にしかはゆめのやうにていつしかといそきおほしゝ御宮つかへもをこたりぬ人の心時にのみよるわさなりけれはさはかりいきおひいかめしくおはせしおとゝの御なこりうち　くの御たから物らうし給所ゝのなとそのかたのおとろへはなけれと大かたのありさまひきかへたるやうにとのゝうちしめやかになりゆくかんの君の御ちかきゆかりそこらこそはよにひろこりたまへと中　くやむことなき御なからひのもとよりもしたしからさりしにことのなさけすこしおくれむら　くしさすき給へりける御本上にて心をかれ給こともありけるゆかりにやたれにもえなつかしくきこえかよひたまはす六条院にはすへてなをむかしにかはらすかすまへきこえ給てうせたまひなむのちのことゝもかきをき給へる御そうふんのふみともにも中宮の御つきにくはへたてまつりたまへれは右大殿なとは中　くその心ありてさるへきおり　くをとつれきこえ給おとこ君たちは御けんふくなとしてをの　くをとなひたまひにしかは殿のおはせてのち心もとなくあはれなることもあれとをのつからなりいて給ひぬへかめりひめ君たちをいかにもてなしたてまつらむとおほしみたる内にもかならすみやつかへのほいふかきよしをおとゝのそうしをき給けれはをとなひ給ぬらむとし月をおしはからせ給ておほせことたえすあれと中宮のいよ　くならひなくのみなりまさり給御けはひにおされてみな人むとくにものし給ふめるすゑにまいりてはるかにめをそはめられたてまつらむもわつらはしく又人にをとりかすならぬさまにてみむはた心つくしなるへきをおもほしたゆたふれせい院よりはいとねんころにおほしのたまはせてかんの君のむかしほひなくてすくしたまふしつらさをさへとりかへしうらみきこ

え給ふていまはまいてさたすきすさましきありさまに思ひすてたまふともうしろやすきおやになすらへてゆつり給へといとまめやかにきこえ給けれはいかゝはあるへきことならむみつからのいとくちおしきすくせにて思ひのほかに心つきなしとおほされにしかはつかしうかたしけなきをこの世のすゑにや御らんしなをされましなとさためかね給かたちいとようおはするきこえありて心かけ申給人おほかり右大殿のくら人の少将とかいひしは三条とのゝ御はらにてあに君たちよりもひきこしいみしうかしつき給人からもいとおかしかりし君いとねんころに申給いつかたにつけてもゝてはなれ給はぬ御なからひなれはこの君たちのむつひまいり給なとするはけとをくもてなしたまはす女房にもけちかくなれよりつゝ思事をかたらふにもたよりありてよるひるあたりさらぬみゝかしかましさをうるさきものゝ心くるしきにかむのとのもおほしたりはゝ北の方の御ふみもしは　くたてまつり給ていとかろひたるほとに侍めれとおほしゆるすかたもやとなむおとゝもきこえ給けるひめ君をはさらにたゝのさまにもおほしをきて給はす中の君をなむいますこし世のきこえかろ　くしからぬほとになすらひならはさもやとおほしけるゆるし給はすはぬすみもとりつへくむくつけきまておもへりこよなき事とはおほさねと女かたの心ゆるし給はぬことのまきれあるはをときゝもあはつけきわさなれはきこえつく人をもあなかしこあやまちひきいつなゝとの給にくたされてなむわつらはしかりける六条の院の御すゑにしゆしやく院の宮の御はらにむまれ給へりし君れせい院に御子のやうにおほしかしつく四位の侍従そのころ十四五はかりにていときひわにおさなかるへきほとよりは心をきておとな　くしくめやすく人にまさりたるおいさきしるくものし給をかむの君はむこにてもみまほしくおほしたりこの殿はかの三条の宮といとちかきほとなれはさるへきおり　くのあそひ所にはきむたちにひかれてみえ給とき　くあり心にくき女のおはするところなれはわかきおとこの心つかひせぬなうみえしらひさまようなかにかたちのよさはこのたちさらぬ蔵人少将なつかしく心はつかしけになまめいたるかたはこの四位侍従の御ありさまにゝる人そなかりける六条の院の御けはひちかうと思なすか心ことなるにやあらむ世のなかにをのつからもてかしつかれ給へる人わかき人ゝ心ことにめてあへりかむの殿もけにこそめやすけれなとのたまひてなつかしう物きこえ給なとす院の御心はへを思いてきこえてなくさむよなういみしうのみおもほゆるをその御かたみにもたれをかはみたてまつらむ右のおとゝはこと　くしき御ほとにてついてなきたいめんもかたきをなとのたまひてはらからのつらにおもひきこえ給へれはか

のきみもさるへき所に思ひてまいりたまふよのつねのすき　くしさもみえすいといたうしつまりたるをそこゝかしこのわかき人ともくちおしうさう　くしき事におもひていひなやましけるむ月のついたちころかむの君の御はらからの大納言たかさこうたひしよ藤中納言故大殿の太らうまきはしらのひとつはらなとまいり給へり右のおとゝも御子とも六人なからひきつれておはしたり御かたちよりはしめてあかぬ事なくみゆる人の御ありさまおほえなり君たちもさま　くいときよけにてとしのほとよりはつかさくらゐすきつゝなにこと思ふらんとみえたるへしよとゝもに蔵人の君はかしつかれたるさまことなれとうちしめりて思ふことありかほなりおとゝは御木丁へたてゝむかしにかはらす御ものかたりきこえ給そのことゝなくてしはしはもえうけたまはらすとしのかすそふまゝに内にまいるよりほかのありきうゐ　くしうなりにて侍れはいにしへの御物かたりもきこえまほしきおり　くおほくすくし侍をなむわかきおのこともはさるへきことにはめしつかはせ給へかならすその心さし御らむせられよといましめ侍りなときこえ給いまはかく世にふるかすにもあらぬやうになりゆくありさまをおほしかすまふるになむすきにし御事もいとゝわすれかたく思たまへられけると申給けるついてに院よりの給はすることほのめかしきこえ給はか　くしううしろみなき人のましらひは中　くみくるしきをとおもひたまへなむわつらふと申給へは内におほせらるゝことあるやうにうけたまはりしをいつかたにおもほしさたむへき事にか院はけに御くらゐをさらせ給へるにこそさかりすきたる心ちすれと世にありかたき御ありさまはふりかたくのみおはしますめるをよろしうおいゝつる女こ侍らましかは思ひたまへよりなからはつかしけなる御中にましらふへき物の侍らてなんくちおしうおもひたまへらるゝそも　く女一の宮の女御はゆるしきこえ給やさき　くの人さやうのはゝかりによりとゝこほる事も侍りかしと申たまへは女御なんつれ　くにのとかになりにたるありさまもおなし心にうしろみてなくさめまほしきをなとかのすゝめ給につけていかゝなとたにおもひ給へよるになんときこえ給これかれこゝにあつまり給て三条の宮にまいり給しゆしやく院のふるき心ものし給人ゝ六条院のかたさまのもかた　くにつけて猶かの入道の宮をはえよきすまいり給なめりこのとのゝ左近中将右中弁侍従の君なともやかておとゝの御ともにいてたまひぬひきつれ給へるいきをひことなりゆふつけて四位侍従まいり給へりそこらおとなしきわかきんたちもあまたさま　くにいつれかはわろひたりつるみなめやすかりつる中にたちをくれてこの君のたちいてたまへるいとこよなくめとまる心ちしてれいの物めてする

わかき人たちはなをことなりけりなといふこのとのゝひめ君の御かたはらにはこれをこそさしならへてみめときゝにくくいふけにいとわかうなまめかしきさましてうちふるまひ給へるにほひかなとよのつねならすひめ君ときこゆれと心おはせむ人はけに人よりはまさるなめりとみしり給らむかしとそおほゆるかむの殿御ねんすたうにおはしてこなたにとのたまへれはひんかしのはしよりのほりてとくちのみすのまへにゐ給へりおまへちかきわかきのむめ心もとなくつほみてうくひすのはつこゑもいとおほとかなるにいとすかせたてまほしきさまのしたまへれは人ゝはかなき事をいふにことすくなに心にくきほとなるをねたかりて宰相の君ときこゆる上らうのよみかけたまふ

おりてみはいとゝ匂もまさるやとすこし色めけ梅のはつ花くちはやしときゝて

よそにてはもきゝなりとやさたむらんしたにゝほへる梅のはつ花さらは袖ふれてみ給へなといひすさふにまことは色よりもとくち　くひきもうこかしつへくさまよふかむの君おくのかたよりゐさりいて給てうたてのこたちやはつかしけなるまめ人をさへよくこそおもなけれとしのひてのたまふなりまめ人とこそつけられたりけれいとくんしたる名かなと思ゐたまへりあるしの侍従てん上なともまたせねは所ゝもありかておはしあひたりせむかうのおしきふたつはかりしてくた物さかつきはかりさしいてたまへりおとゝはねひまさりたまふまゝにこ院にいとようこそおほえたてまつり給へれこの君はに給へる所もみえ給はぬをけはひのいとしめやかになまめひたるもてなしゝもそかの御わかさかり思ひやらるゝかうさまにそおはしけんかしなと思いてられ給てうちしほれ給なこりさへとまりたるかうはしさを人ゝはめてくつかへる侍従の君まめ人の名をうれたしと思ひけれは廿よ日のころむめの花さかりなるにゝほひすくなけにとりなされしすき物ならはむかしとおほして藤侍従の御もとにおはしたり中門いり給ほとにおなしなをしすかたなる人たてりけりかくれなむと思ひけるをひきとゝめたれはこのつねにたちわつらふ少将なりけりしん殿のにしおもてにひはさうのことのこゑするに心をまとはしてたてるなめりくるしけや人のゆるさぬ事思はしめむはつみふかゝるへきわさかなとおもふことのこゑもやみぬれはいさしるへし給へまろはいとたと　くしとてひきつれてにしのわたとのゝまへなるこうはいの木のもとにむめかえをうそふきてたちよるけはいの花よりもしるくさとうちにほへれはつまとおしあけて人ゝあつまをいとよくかきあはせたり女のことにてりよのうたはかうしもあはせぬをいたしとおもひていまひとかへり

おりかへしうたふひはもになくいまめかしゆへありてもてなひたまへるあたり
そかしと心とまりぬれはこよひはすこしうちとけてはかなしことなともいふう
ちよりわこんさしいてたりかたみにゆつりてゝふれぬに侍従の君してかむのと
のこちしのおとゝの御つまをとになむかよひたまへるときゝわたるをまめやか
にゆかしうなんこよひはなをうくひすにもさそはれたまへとのたまひいたした
れはあまへてつめくふへき事にもあらぬをと思ひておさ　く心にもいらすかき
わたし給へるけしきいとひゝきおほくきこゆつねにみたてまつりむつひさりし
おやなれと世におはせすなりにきと思ふにいと心ほそきにはかなき事のついて
にもおもひいてたてまつるにいとなんあはれなるおほかたこの君はあやしうこ
大納言の御ありさまにいとようおほえことのねなとたゝそれとこそおほえつれ
とてなき給もふるめい給しるしのなみたもろさにや少将もこゑいとおもしろう
てさきくさうたふさかしら心つきてうちすくしたる人もましらねはをのつから
かたみにもよをされてあそひたまふにあるしの侍従はこおとゝにたてまつり
給へるにやかやうのかたはをくれてさかつきをのみすゝむれはことふきをたに
せんやとはつかしめられて竹かはをおなしこゑにいたしてまたわかけれとおか
しうゝたふすのうちよりかはらけさしいつゑひのすすみてはしのふる事もつゝ
まれすひかことするわさとこそきゝ侍れいかにもてなひ給そととみにうけひか
すこうちきかさなりたるほそなかの人かなつかしうしみたるをとりあへたるま
ゝにかつけ給なにそもそなとさうときて侍従はあるしの君にうちかつけていぬ
ひきとゝめてかつくれとみつむまやにて夜ふけにけりとてにけにけり少将はこ
の源侍従の君のかうほのめきよるめれはみな人これにこそ心よせたまふらめわ
かみはいとゝくむしいたく思よはりてあちきなうそうらむる

人はみな花に心をうつすらむひとりそまとふ春の夜のやみうちなけきてた
てはうちの人のかへし

おりからやあはれもしらむ梅の花たゝかはかりにうつりしもせしあしたに

四位の侍従のもとよりあるしの侍従のもとに夜部はいとみたりかはしかりしを
人ゝいかにみ給けんとみ給へとおほしうかなかちにかきて

竹かはのはしうちいてし一ふしにふかき心のそこはしりきやとかきたりし
む殿にもてまいりてこれかれみたまふてなともいとおかしうもあるかないかな
る人いまよりかくとゝのひたらむおさなくて院にもをくれたてまつりはゝ宮の
しとけなうおほしたてたまへれと猶人にはまさるへきにこそはあめれとてかん
の君はこの君たちのてなとあしきことをはつかしめ給返事けにいとわかく夜部

はみつむまやをなんとかめきこゆめりし

竹河に夜をふかさしといそきしもいかなるふしをおもひをかましけにこのふしをはしめにてこの君の御さうしにおはしてけしきはみよる少将のおしはかりしもしるくみな人心よせたり侍従の君もわかき心ちにちかきゆかりにてあけくれむつひまほしう思ひけりやよひになりてさくさくらあれはちりかひくもりおほかたのさかりなるころのとやかにおはする所はまきるゝことなくはしちかなるつみもあるましかめりそのころ十八九のほとやおはしけむ御かたちも心はへもとり　くにそおかしきひめ君はいとあさやかにけたかういまめかしきさまし給てけにたゝ人にてみたてまつらむはにけなうそみえ給さくらのほそなか山吹なとのおりにあひたる色あひのなつかしきほとにかさなりたるすそまてあひきやうのこほれおちたるやうにみゆる御もてなしなともらう　くしく心はつかしきけさへそひたまへりいま一所はうすこうはいにさくら色にてやなきのいとのやうにたを　くとたゆみいとそひやかになまめかしうすみたるさましておもりかに心ふかきけはひはまさり給へれとにほひやかなるけはひはこよなしとそ人おもへる五うちたまふとてさしむかひ給へるかむさし御くしのかゝりたるさまともいとみところあり侍従のきみけんそし給とてちかうさふらひ給にあに君たちさしのそき給て侍従のおほえこよなうなりにけり御五のけんそゆるされにけるをやとておとな　くしきさましてつゐゐ給へはおまへなる人〻とかうゐなをる中将宮仕のいそかしうなり侍ほとに人にをとりにたるはいとほいなきわさかなとうれへ給へは弁官はまいてわたくしの宮つかへをこたりぬへきまゝにさのみやはおほしすてんなと申給五うちさしてはちらいておはさうするいとおかしけなり内わたりなとまかりありきてもことのおはしまさましかはと思たまへらるゝことおほくこそなと涙くみてみたてまつりたまふ廿七八の程に物し給へはいとよくとゝのひてこの御ありさまともをいかていにしへおほしをきてしにたかへすもかなとおもひゐ給へりおまへの花の木ともの中にもにほひまさりておかしきさくらをおらせてほかのにはにすこそなともてあそひ給をおさなくおはしましゝ時この花はわかそ　くとあらそひ給しをことのはひめ君の御はなそとさため給うへはわか君の御木とさため給しをいとさはなきのゝしらねとやすからす思たまへられしはやとてこのさくらの老木になりにけるにつけてもすきにけるよはひを思たまへいつれはあまたの人にをくれ侍にける身のうれへもとめかたうこそなとなきみわらひみきこえ給てれいよりはのとやかにおはす人のむこになりて心しつかにもいまはみえ給はぬを花に心とゝめてものし給かんの

君かくおとなしき人のおやになり給御としのほと思よりはいとわかうきよけに
猶さかりの御かたちとみえ給へりれせい院のみかとはおほくはこの御ありさま
の猶ゆかしうむかし恋しうおほしいてられけれはなにゝつけてかはとおほしめ
くらしてひめ君の御ことをあなかちにきこえ給にそありける院へまいり給はん
ことはこの君たちそなをものゝはへなき心ちこそすへけれよろつのこと時につ
けたるをこそ世人もゆるすめれけにいとみたてまつらまほしき御ありさまはこ
の世にたくひなくおはしますめれとさかりならぬ心ちそするやことふえのしら
へ花とりの色をもねをも時にしたかひてこそ人のみゝもとまる物なれ春宮はい
かゝなと申給へはいさやはしめよりやむことなき人のかたはらもなきやうにて
のみものし給めれはこそ中　くにてましらはむはむねいたく人わらへなること
もやあらむとつゝましけれはとのおはせましかはゆくするゑの御すくせ　くはし
らすたゝいまはかひあるさまにもてなし給てましをなとのたまひいてゝみなも
のあはれなり中将なとたちたまひてのち君たちはうちさしたまへる五うち給む
かしよりあらそひ給さくらをかけ物にて三はむにかす一かちたまはむかたには
猶花をよせてんとたはふれかはしきこえ給くらうなれはゝしちかうてうちはて
たまふみすまきあけて人ゝみないとみねんしきこゆおりしもれいの少将侍従の
君の御さうしにきたりけるをうちつれていて給にけれはおほかた人すくなゝる
にらうのとのあきたるにやをらよりてのそきけりかうゝれしきおりをみつけた
るはほとけなとのあらはれたまへらんにまいりあひたらむ心ちするもはかなき
心になんゆふくれのかすみのまきれはさやかならねとつく　くとみれはさくら
いろのあやめもそれとみわきつけにちりなむのちのかたみにもみまほしくにほ
ひおほくみえ給をいとゝことさまになり給なんことわひしく思ひまさらるわか
き人ゝのうちとけたるすかたともゆふはへおかしうみゆ右かたせ給ぬこまのら
さうをそしやなとはやりかにいふもあり右に心をよせたてまつりてにしのおま
へによりて侍木を左になしてとしころの御あらそひのかゝれはありつるそかし
と右かたは心地よけにはけましきこゆなにことゝしらねとおかしとききてさし
いらへもせまほしけれとうちとけ給へるおり心ちなくやはと思ひていてゝゐぬ
又かゝるまきれもやとかけにそひてそうかゝいありきける君たちははなのあら
そひをしつゝあかしくらし給に風あらゝかに吹たるゆふつかたみたれおつるか
いとくちおしうあたらしけれはまけかたのひめ君

　桜ゆへ風に心のさはくかなおもひくまなき花とみる　く御かたの宰相のきみ

さくとみてかつはちりぬる花なれはまくるをふかきうらみともせすときこえたすくれは右のひめ君

風にちることはよのつね枝なからうつろふ花をたゝにしもみしこの御かたの大輔のきみ

心ありて池のみきはにおつる花あわとなりても我かたによれかちかたのわらはへおりて花のしたにありきてちりたるをいとおほくひろいてもてまいれり

大空の風にちれともさくら花をのか物とそかきつめてみる左のなれき

桜花にほひあまたにちらさしとおほふはかりの袖はありやは心せはけにこそみゆめれなといひおとすかくいふに月日はかなくすくすもゆくすゑのうしろめたきをかんの殿はよろつにおほす院よりは御せうそこ日〻にあり女御うとうとしうおほしへたつるにやうへはこゝにきこえうとむるなめりといとにくけにおほしの給へはたはふれにもくるしうなんおなしくはこのころのほとにおほしたちねなといとまめやかにきこえ給さるへきにこそはおはすらめいとかうあやにくにの給もかたしけなしなとおほしたり御てうとなとはそこらしをかせ給へれは人〻のさうそくなにくれのはかなき事をそいそき給これをきくに蔵人の少将はしぬはかり思ひてはゝきたの方をせめたてまつれはきゝわつらひ給ひていとかたはらいたき事につけてほのめかしきこゆるもよにかたくなしきやみのまとひになむおほしゝるかたもあらはおしはかりて猶なくさめさせ給へなといとおしけにきこえ給をくるしうもあるかなとうちなけきたまひていかなる事と思たまへさたむへきやうもなきを院よりわりなくの給はするにおもふたまへみたれてなんまめやかなる御心ならはこの程をおほしゝつめてなくさめきこえんさまをもみ給てなん世のきこえもなたらかならむなと申給もこの御まいりすくして中の君をとおほすなるへしさしあはせてはうたてしたりかほならむまたくらゐなともあさへたる程をなとおほすにおとこはさらにしか思ひうつるへくもあらすほのかにみたてまつりてのちはおもかけに恋しういかならむおりにとのみおほゆるにかうたのみかゝらすなりぬるを思ひなけき給事かきりなしかひなき事もいはむとてれいの侍従のさうしにきたれは源侍従のふみをそみゐ給へりけるひきかくすをさなめりとみてうはひとりつことありかほにやと思ひていたうもかくさすそこはかとなくたゝ世をうらめしけにかすめたり

つれなくてすくる月日をかそへつゝ物うらめしきくれの春かな人はかうこそのとやかにさまよくねたけなめれわかいと人わらはれなる心いられをかたへはめなれてあなつりそめられにたるなと思ふもむねいたけれはことに物もいは

れてれいかたらふ中将のおもとのさうしのかたにゆくもれいのかひあらしかし
となけきかちなり侍従の君はこの返事せむとてうへにまいり給をみるにいとは
らたゝしうやすからすわかき心ちにはひとへに物そおほえけるあさましきまて
うらみなけゝはこのまへ申も余たはふれにくゝいとおしと思ひていらへもおさ
おさせすかの御五のけんそせしゆふくれのこともいひいてゝさはかりのゆめを
たにまたみてしかなあはれなにをたのみにていきたらむかうきこゆることもの
こりすくなうおほゆれはつらきもあはれといふ事こそまことなりけれといとま
めたちていふあはれといひやるへきかたなきことなりかのなくさめ給らん御さ
ま露はかりうれしとおもふへきけしきもなけれはけにかの夕くれのけんそうな
りけんにいとゝかうあやにくなる心はそひたるならんとことはりに思ひてきこ
しめさせたらはいとゝいかにけしからぬ御心なりけりとうとみきこえたまはむ
心くるしと思きこえつる心もうせぬいとうしろめたき御心なりけりとむかひ火
つくれはいてやさはれやいまはかきりの身なれは物おそろしくもあらすなりに
たりさてもまけたまひしこそいと　くおしかりしかをいらかにめしいれてやは
めくはせたてまつらましかはこよなからまし物をなといひて
　いてやなそ数ならぬ身にかなはぬは人にまけしの心なりけり中将うちわらい
て
　わりなしやつよきによらむかちまけを心ひとつにいかゝまかするといらふ
るさへそつらかりける
　あはれとて手をゆるせかしいきしにを君にまかする我身とならはなきみわ
らいみかたらいあかす又の日はう月になりにけれはゝらからの君たちのうちに
まいりさまよふにいたうくんしいりてなかめゐたまへれははゝ北のかたはなみ
たくみておはすおとゝも院のきこしめす所もあるへしなにゝかはおほな　くき
ゝいれむと思ひてくやしうたいめんのついてにもうちいてきこえすなりにし身
つからあなかちに申さましかはさりともえたかへ給はさらましなとのたまふさ
てれいの
　花をみて春はくらしつけふよりやしけきなけきのしたにまとはむときこえ
たまへりおまへにてこれかれ上らうたつ人ゝこの御けさうひとのさま　くにい
とおしけなるをきこえしらするなかに中将のおもといきしにをといひしさまの
ことにのみはあらす心くるしけなりしなときこゆれはかむの君もいとおしとき
ゝ給おとゝ北の方のおほす所によりせめて人の御うらみふかくはととりかへあ
りておほすこの御まいりをさまたけやうに思ふらんはしもめさましきことかき

りなきにてもたゝ人にはかけてあるましき物にことのゝおほしをきてたりし物を院にまいり給はむたにゆくするゑのはへ　くしからぬをおほしたるおりしもこの御ふみとりいれてあはれかる御返事

　けふそしる空をなかむる気色にて花に心をうつしけりともあないとおしたはふれにのみもとりなすかなゝといへとうるさかりてかきかへす九日にそまいり給右の大殿御くるま御せんの人〻あまたゝてまつり給へり北のかたもうらめしと思きこえたまへとゝしころさもあらさりしにこの御ことゆへしけうきこえかよひたまへるを又かきたえんもうたてあれはかつけ物ともよき女のさうそくともあまたたてまつれ給へりあやしううつし心もなきやうなる人のありさまをみ給へあつかふほとにうけたまはりとゝむる事もなかりけるをおとろかさせ給はぬもうと　くしくなんとそありけるをひらかなるやうにてほのめかし給へるをいとおしとみ給おとゝも御ふみあり身つからもまいるへきに思たまへつるにつゝしむ事の侍てなんおの子ともさうやくにとてまいらすうとからすめしつかはせ給へとて源少将兵衛佐なとたてまつれ給へりなさけはおはすかしとよろこひきこえ給大納言とのよりも人〻の御くるまたてまつれ給北のかたは古おとゝの御むすめまきはしらのひめ君なれはいつかたにつけてもむつましうきこえかよひ給へけれとさしもあらす藤中納言はしも身つからおはして中将弁のきみたちもろともにことをこなひ給殿のをはせましかはとよろつにつけてあはれなり蔵人のきみれいの人にいみしきことはをつくしていまはかきりと思はへるいのちのさすかにかなしきをあはれと思とはかりたに一ことのたまはせはそれにかけとゝめられてしはしもなからへやせんなとあるをもてまいりてみれはひめ君ふたところうちかたらひていといたうくんしたまへりよるひるもろともにならひ給て中の戸はかりへたてたるにしひんかしをたにいといふせきものにし給てかたみにわたりかよひおはするをよそ　くにならむ事をおほすなりけり心ことにしたてひきつくろひたてまつり給へる御さまいとおかし殿のおほしの給しさまなとをおほしいてゝ物あはれなるおりからにやとりてみたまふおとゝ北のかたのさはかりたちならひてたのもしけなる御中になとかうすゝろことを思いふらんとあやしきにもかきりとあるをまことやとおほしてやかてこの御ふみのはしに

　あはれてふつねならぬ世のひとこともいかなる人にかくる物そはゆゝしきかたにてなんほのかに思しりたるとかきたまひてかういひやれかしとの給をやかてたてまつれたるをかきりなうめつらしきにもおりおほしとむるさへいとゝ

なみたもとゝまらすたちかへりたかなはたゝしなとかことかましくて

いける世のしには心にまかせねはきかてやゝまむ君かひとことつかのうへにもかけ給へき御心のほと思ひ給へましかはひたみちにもいそかれ侍らましをなとあるにうたてもいらへをしてけるかなかきかへてやりつらむよとくるしけにおほして物もの給はすなりぬおとなわらはめやすきかきりをとゝのへられたりおほかたのきしきなとは内にまいり給はましにかはることなしまつ女御の御かたにわたり給てかんの君は御物語なときこえ給夜ふけてなんうへにまうのほり給けるきさき女御なとみなとしころへてねひ給へるにいとうつくしけにてさかりにみところあるさまをみたてまつりたまふはなとてかはおろかならむはなやかにときめき給たゝ人たちて心やすくもてなし給へるさましもそけにあらまほしうめてたかりけるかんの君をしはしさふらひ給なんと御心とゝめておほしけるにいとゝくやをらいて給にけれはくちをしう心うしとおほしたり源侍従の君をはあけくれおまへにめしまつはしつゝけにたゝむかしのひかる源氏のおいゝて給しにをとらぬ人の御おほへなり院のうちにはいつれの御かたにもうとからすなれましらひありき給ふこの御かたにも心よせありかほにもてなしてしたにはいかにみたまふらむの心さへそひ給へりゆふくれのしめやかなるに藤侍従とつれてありくにかの御かたの御前ちかくみやらるゝ五葉に藤のいとおもしろくさきかゝりたるを水のほとりの石にこけをむしろにてなかめゐ給へりまほにはあらねと世の中うらめしけにかすめつゝかたらふ

手にかくる物にしあらは藤の花まつよりまさる色をみましやとて花をみあけたるけしきなとあやしくあはれに心くるしくおもほゆれは我心にあらぬ世のありさまにほのめかす

むらさきの色はかよへと藤の花心にえこそかゝらさりけれまめなる君にていとおしと思へりいと心まとふはかりは思ひいられさりしかとくちおしうはおほえけりかの少将の君はしもまめやかにいかにせましとあやまちもしつへくしつめかたくなんおほえけるきこえ給し人〻中の君をとうつろふもあり少将の君をははゝきたのかたの御うらみによりさもやとおもほしてほのめかしきこえ給しをたえてをとつれすなりにたり院にはかの君たちもしたしくもとよりさふらひたまへとこのまいり給てのちおさ　くまいらすまれ　く殿上のかたにさしのそきてもあちきなうにけてなんまかてける内には古おとゝの心さしをき給へるさまことなりしをかくひきたかへたる御宮つかへをいかなるにかとおほして中将をめしてなんの給はせける御気色よろしからすされはこそ世人の心のうちも

かたふきぬへき事なりとかねて申し事をおほしとるかたことにてかうおほしたちにしかはともかくもきこえかたくて侍にかゝるおほせ事の侍れはなにかしらか身のためもあちきなくなん侍といとものしと思ひてかんの君を申給いさやたゝいまかうにはかにしも思たゝさりしをあなかちにいとおしうの給はせしかはうしろみなきましらひのうちわたりははしたなけなめるをいまは心やすき御ありさまなめるにまかせきこえてと思よりしなりたれも　くひなからむ事はありのまゝにもいさめたまはていまひきかへし右のおとゝもひか　くしきやうにおもむけてのたまふなれはくるしうなんこれもさるへきにこそはとなたらかにの給て心もさはかい給はすそのむかしの御すくせはめにみえぬものなれはかうおほしの給はするをこれは契ことなるともいかゝはそうしなをすへきことならむ中宮をはゝかりきこえ給とて院の女御をはいかゝしたてまつり給はむとするうしろみやなにやとかねておほしかはすともさしもえ侍らしよしみきゝ侍らんようおもへは内は中宮おはしますとてこと人はましらひ給はすや君につかふまつる事はそれか心やすきこそむかしよりけうあることにはしけれ女御はいさゝかなることのたかひめありてよろしからす思きこえたまはむにひかみたるやうになん世のきゝみゝも侍らんなとふた所して申給へはかんの君いとくるしとおほしてさるはかきりなき御思のみ月日にそへてまさる七月よりはらみ給にけりうちなやみたまへるさまけに人のさま　くにきこえわつらはすもことはりそかしいかてかはかゝらむ人をなのめにみきゝすくしてはやまんとそおほゆるあけくれ御あそひをせさせ給つゝ侍従もけちかうめしいるれは御こととのねなとはきゝたまふかの梅か枝にあはせたりし中将のおもとのわこんもつねにめしいてゝひかせ給へは聞あはするにもたゝにはおほえさりけりそのとしかへりておとこたうかせられけり殿上のわか人ともの中にものゝ上手おほかるころをひなりその中にもすくれたるをえらせ給てこの四位侍従右のかとうなりかの蔵人の少将かく人のかすのうちにありけり十四日の月のはなやかにくもりなきに御前よりいてゝれせい院にまいる女御もこのみやすところもうへに御つほねしてみ給ふかんたちめみこたちひきつれてまいりたまふ右の大殿ちしの大殿のそうをはなれてきら　くしうきよけなる人はなきよなりとみゆうちのおまへよりもこの院をはいとはつかしうことに思ひきこえてみな人よういをくはふる中にもくらひとの少将はみたまふらんかしと思ひやりてしつ心なしにほひもなくみくるしきわた花もかさす人からにみわかれてさまもこゑもいとおかしくそありける竹かはうたひて御はしのもとにふみよるほとすきにしよのはかなかりしあそひも思ひ

いてられけれはひか事もしつへくて涙くみけりきさいの宮の御かたにまいれはうへもそなたにわたらせ給て御らんす月は夜ふかくなるまゝにひるよりもはしたなうすみのほりていかにみたまふらんとのみおほゆれはふむそらもなうたゝよひありきてさかつきもさしてひとりをのみとかめらるゝはめいほくなくなん夜一よところ　くかきありきていとなやましうくるしくてふしたるに源侍従を院よりめしたれはあなくるししはしやすむへきにとむつかりなからまいり給へり御前のことゝもなととはせ給かとうはうちすくしたる人のさき　くするわさをえらはれたるほと心にくかりけりとてうつくしとおほしためり万春楽を御くちすさみにし給つゝ宮す所の御かたにわたらせ給へは御ともにまいり給物みにまいりたるさと人おほくてれいよりはゝなやかにけはひいまめかしわたとのゝとくちにしはしゐてこゑきゝしりたる人に物なとのたまふ一夜の月かけははしたなかりしわさかな蔵人の少将の月の光にかゝやきたりしけしきもかつらのかけにはつるにはあらすやありけん雲のうへちかくてはさしもみえさりきなとかたり給へは人〻あはれときくもありやみはあやなきを月はえはいますこし心こととなりとさためきこえしなとすかしてうちより

　竹かはのその夜のことは思いつやしのふはかりのふしはなけれといふはかなきことなれと涙くまるゝもけにいとあさくはおほえぬことなりけりと身つから思しらる

　なかれてのたのめむなしき竹かはに世はうきものとおもひしりにき物あはれなるけしきを人〻おかしかるさるはおりたちて人のやうにもわひ給はさりしかと人さまのさすかに心くるしうみゆるなりうちいてすくす事もこそ侍れあなかしことてたつほとにこなたにとめしいつれはゝしたなき心ちすれとまいり給ふこ六条院のたうかのあしたに女かくにてあそひせられけるいとおもしろかりきと右のおとゝのかたられしなにこともかのわたりのさしつきなるへきひとかたくなりにけるよなりやいとものゝ上すなる女さへおほくあつまりていかにはかなきこともおかしかりけんなとおほしやりて御ことゝもしらへさせ給てさうは宮す所ひはゝしゝうにたまふわこんをひかせ給てこの殿なとあそひ給宮す所の御ことのねまたかたなりなるところありしをいとようをしへないたてまつり給てけりいまめかしうつまをとよくてうたこくの物なと上すにいとよくひき給なにことも心もとなくをくれたることはものしたまはぬ人なめりかたちはたいとおかしかへしと猶心とまるかやうなるおりおほかれとをのつからけとをからすみたれ給かたなくなれ　くしうなとはうらみかけねとおり　くにつけて思ふ

心のたかへるなけかしさをかすむるもいかゝおほしけんしらすかしう月に女宮むまれ給ぬことにけさやかなるものゝはへもなきやうなれと院の御気色にしたかひて右の大殿よりはしめておほんうふやしなひし給所　くおほかりかんの君つといたきもちてうつくしみ給にとうまいり給へきよしのみあれはいかの程にまいり給ぬ女一宮一所おはしますにいとめつらしくうつくしうておはすれはいといみしうおほしたりいとゝたゝこなたにのみおはします女御かたの人〳〵いとかゝらてありぬへき世かなとたゝならすいひ思へりさうしみの御心ともはことにかる　くしくそむき給にはあらねとさふらふ人〳〵の中にくせ　くしきこともいてきなとしつゝかの中将の君のさいへと人のこのかみにてのたまひし事かなひてかんの君もむけにかくいひ　くのはてゝいかならむ人わらへにはしたなうもやもてなされむうへの御心はへはあさからねとゝしへてさふらひ給御かた　くよろしからす思ひはなち給はゝくるしくもあるへきかなとおもほすに内にはまことに物しとおほしつゝたひ　く御けしきありと人のつけきこゆれはわつらはしくて中の姫君をおほやけさまにてましらはせたてまつらむことをおほして内侍のかみをゆつり給おほやけいとかたうし給ことなりけれはとしころかうおほしをきてしかとえしゝ給はさりしを故おとゝの御心をおほして久しうなりにけるむかしのれいなとひきいてゝそのことかなひ給ぬこの君の御すくせにてとしころ申給しはかたきなりけりとみえたりかくて心やすくて内すみもし給へかしとおほすにもいとおしう少将の事をはゝ北のかたのわさとのたまひし物をたのめきこえしやうにほのめかしきこえしもいかに思ひたまふらんとおほしあつかふ弁の君して心うつくしきやうにおとゝにきこえ給うちよりかゝる仰ことのあれはさま　くにあなかちなるましらひのこのみと世のきゝみゝもいかゝと思給へてなんわつらひぬるときこえ給へはうちの御気色はおほしとかむるもことはりになんうけたまはるおほやけことにつけても宮つかへし給はぬはさるましきわさになんはやおほしたつへきになんと申給へり又このたひは中宮の御気色とりてそまいり給ふおとゝおはせましかはおしけち給はさらましなとあはれなることゝもをなんあね君はかたちなと名たかうおかしけなりときこしめしをきたりけるをひきかへ給へるをなま心ゆかぬやうなれとこれもいとらう　くしく心にくゝもてなしてさふらひ給さきのかんの君かたちをかへてんとおほしたつをかた　くにあつかひきこえ給ふほとにをこなひも心あはたゝしうこそおほされめいますこしいつかたも心のとかにみたてまつりなし給てもとかしき所なくひたみちにつとめ給へと君たちの申給へはおほしとゝこほりて内には時〳〵しのひ

てまいり給おりもあり院にはわつらはしき御心はへのなをたえねはさるへきおりもさらにまいり給はすいにしへをおもひいてしかさすかにかたしけなうおほえしかしこまりに人のみなゆるさぬことにおもへりしをもしらすかほに思ひてまいらせたてまつりてみつからさへたはふれにてもわか　くしき事の世にきこえたらむこそいとまはゆくみくるしかるへけれとおほせとさるつみによりとはた宮す所にもあかしきこえ給はねは我をむかしより故おとゝはとりわきておほしかしつきかんの君はわかきみをさくらのあらそひはかなきおりにも心よせ給しなこりにおほしおとしけるよとうらめしう思きこえ給けり院のうへはたましていみしうつらしとそおほしのたまはせけるふるめかしきあたりにさしはなちて思おとさるゝもことはり也とうちかたらひ給てあはれにのみおほしまさるとしころありて又おとこみこうみ給つそこらさふらひ給御方　くにかゝる事なくてとしころになりにけるをゝろかならさりける御すくせなとよ人おとろくみかとはましてかきりなくめつらしとこのいま宮をは思きこえ給へりおりい給はぬ世ならましかはいかにかひあらましいまはなに事もはへなき世をいとくちおしとなんおほしける女一宮をかきりなき物におもひきこえ給しをかくさま　くにうつくしくてかすそひ給へれはめつらかなるかたにていとことにおほいたるをなん女御もあまりかうては物しからむと御心うこきけることにふれてやすからすくね　くしきこといてきなとしてをのつから御中もへたゝるへかめり世のこととして数ならぬ人のなからひにももとよりことはりえたる方にこそあひなきおほよその人も心をよするわさなめれは院の内の上下の人〻いとやむことなくて久しくなり給へる御方にのみことはりてはかないことにもこの方さまをよからすとりなしなとするを御せうとの君たちもされはよあしうやはきこえをきけるといとゝ申給心やすからすきゝくるしきまゝにかゝらてのとやかにめやすくて世をすくす人もおほかめりかしかきりなきさいはひなくて宮つかへのすちは思ひよるましきわさなりけりとおほうへはなけき給きこえし人〻のめやすくなりのほりつゝさてもおはせましにかたわならぬそあまたあるやその中に源侍従とていとわかうひわつなりとみしは宰相中将にてにほふやかほるやときゝにくゝめてさはかるなるけにいと人からおもりかに心にくきをやんことなきみこたち大臣の御むすめを心さしありてのたまふなるなともきゝいれすなとあるにつけてそのかみはわかう心もとなきやうなりしかとめやすくねひまさりぬへかめりなといひおはさうす少将なりしも三位中将とかいひておほえありかたちさへあらまほしかりきやなとなま心わろきつかうまつり人はうち忍ひつゝうるさけ

なる御有さまよりはなといふもありていとおしうそみえし此中将は猶思そめし心たえすうくもつらくも思ひつゝ左大臣の御むすめをえたれとおさ　く心もとめすみちのはてなるひたち帯のとてならひにもことくさにもするはいかにおもふやうのあるにか有けん宮す所やすけなきよのむつかしさにさとかちになり給ひにけりかんの君思ひしやうにはあらぬ御有さまをくちおしとおほすうちの君は中　くいまめかしう心やすけにもてなしてよにもゆへあり心にくきおほえにてさふらひ給左大臣うせ給て右は左にとう大納言左大将かけ給へる右大臣になり給つき　くの人〳〵なりあかりてこのかほる中将は中納言に三位の君は宰相になりて悦したまへる人〳〵この御そうより外に人なきころをひになんありける中納言の御悦にさきのないしのかんの君にまいり給へりおまへの庭にてはいしたてまつり給かんの君たいめんし給てかくいと草ふかくなりゆくむくらの門をよき給はぬ御心はえにも先昔の御こと思出られてなんなときこえ給御こゑあてにあいきやうつききかまほしういまめきたりふりかたくもおはするかなかゝれは院のうへは恨給御心たえぬそかし今つゐにことひきいて給てんと思悦なとは心にはいとしも思給へねとも先御らむせられにこそまいり侍れよきぬなとの給はするはをろかなるつみにうちかへさせ給にやと申給けふはさたすきにたる身のうれへなときこゆへきついてにもあらすとつゝみ侍れとわさと立より給はん事はかたきをたいめんなくてはたさすかにくた　くしきことになん院にさふらはるゝかいといたう世の中を思みたれなか空なるやうにたゝよふを女御をたのみきこえ又きさいの宮の御方にもさりともおほしゆるされなんと思ひ給へすくすにいつかたにもなめけに心ゆかぬ物におほされたなれはいとかたはらいたくて宮たちはさてさふらひ給このいとましらひにくけなる身つからはかくて心やすくたになかめすくい給へとてまかてさせたるをそれにつけてもきゝにくゝなんうへにもよろしからすおほしの給はすなるついてあらはほのめかしそうし給へとさまかうさまにたのもしく思ひ給へていたしたて侍りしほとはいつかたをも心やすくうちとけたのみきこえしかといまはかゝることあやまりにおさなうおほけなかりける身つからの心をもとかしくなんとうちない給けしき也さらにかうまておほすましきことになんかゝる御ましらひのやすからぬことはむかしよりさることゝなり侍にけるをくらいをさりてしつかにおはしまし何事もけさやかならぬ御ありさまとなりにたるにたれもうちとけ給へるやうなれとをの　くうち　くはいかゝいとましくもおほすこともなからむ人はなにのとかとみぬこともわか御身にとりてはうらめしくなんあいなきことに心うこかひ給こと女御

后のつねの御くせなるへしさはかりのまきれもあらし物とてやはおほしたちけんたゝなたらかにもてなして御らんしすくすへきことに侍也おのこのかたにてそうすへき事にも侍らぬ事になんといとすく　くしう申給へはたいめんのついてにうれへきこえむとまちつけたてまつりたるかひなくあわの御ことはりやとうちわらひておはする人のおやにてはか　くしかり給へるほとよりはいとわかやかにおほといたる心ちす宮す所もかやうにそおはすへかめるうちのひめ君の心とまりておほゆるもかうさまなるけはひのおかしきそかしと思ゐ給へり内侍のかみもこのころまかて給へりこなたかなたすみ給へるけはひおかしうおほかたのとやかにまきるゝ事なき御ありさまとものすのうち心はつかしうおほゆれは心つかひせられていとゝもてしつめゝやすきを大うへはちかうもみましかはとうちおほしけり大臣殿はたゝこのとのゝひんかしなりけりたひきやうのゑかのきんたちなとあまたつとひ給兵部卿の宮左の大臣とのゝのりゆみのかへりたちすまゐのあるしなとにはおはしましを思ひてけふのひかりとさうしたてまつり給けれとおはしまさす心にくゝもてかしつきたまふひめ君たちをさるは心さしことにいかてと思ひきこえ給へかめれと宮そいかなるにかあらん御心もとめ給はさりける源中納言のいとゝあらまほしうねひとゝのひ何事もをくれたるかたなくものし給をおとゝも北のかたもめとゝめ給けりとなりのかくのゝしりてゆきちかふ車のをとさきをふこゑ　くもむかしのこと思いてられてこの殿には物あはれになかめ給故宮うせ給て程もなくこのおとゝのかよひ給しほとをいとあはつけいやうによ人はもとくなりしかとかくてものし給もさすかなるかたにめやすかりけりさためなのよやいつれにかよるへきなとのたまふ左の大殿の宰相中将たいきやうの又の日夕つけてこゝにまいり給へり宮すところさとにおはすとおもふにいとゝ心けそうそひておほやけのかすまへたまふよろこひなとはなにともおほえ侍らすわたくしの思ふ事かなはぬなけきのみ年月にそえて思給へはるけんかたなき事と涙をしのこふもことさらめいたり廿七八のほとのいとさかりににほひはなやかなるかたちし給へりみくるしの君たちの世中を心のまゝにおこりてつかさくらいをはなにとも思はすゝくしいますからうや故とのおはせましかはこゝなる人ゝもかゝるすさひ事にそ心はみたらましとうちなき給右兵衛督右大弁にてみな非参議なるをうれはしと思へり侍従ときこゆめりしそこのころ頭の中将ときこゆめるとしよはひのほとはかたわならねと人にをくるとなけき給へり宰相はとかくつきつきしく